

道歌集 山岩戸開

卷 四 第

252
151

大日本國は神をもて根元とし成り出づる
 國なれば此の神を祭り奉るばかりにて
 脩り家も齋は國も治るに至る只其の根元
 もとづきて其の元をたて其の一つを能く保
 つを以て唯一の教と言ふ其の一なるものは
 天の御中主の尊也其一より出でて天神七代
 地神五代の徳をなし給ふに至て天地七代地
 神五代の徳をこごとく兼ねそなへ給ふは

皇朝
 保元
 23

天照大神の御徳なるゆゑに
 天照大神のつたへ給へる日の本の御教を知
 らずして神徳の廣大なる事をわきまへずん
 ば天恩地恩を知るべからず。天恩地恩を思は
 ずば國恩主恩を知るべからず。國恩主恩を思
 はずんば先祖父母の恩を知るべからず。先祖
 父母の恩を思はずんば人の恩を知るべから
 ず。此の恩を思はずんば私の欲にのみ引かれ

て神明をくらしまじ無明の闇に迷ふべし。ゆゑ
 に禊教モトメの神傳をうけ神理を極めて日々の務
 めをはげむべし。若し是をわきまへず恩を知
 らずんば鬼畜に同じうして神明に見はなさ
 れ災ひ其の身其の家其の國に及ぶものなり
 等閑の事にあらず深く思ひたまふべし。
 右教祖井上正鐵大人の御詞を書きつらねて
 はしがきの代りごす

明治三十八年十一月二十三日

中山瀧太誌す

(一)

息

は君

と

ろ

は政府

國民

は。

耳や目

口

や手

足

なり

けり。

從

へや

妻は

夫に

子は

親に

。

こ

ろ

は息

に事

は時

世に。

(三)

世の中を。開く。始めに。みそぎして。

又みそぎして。開く世の中。

(四)

中つせに。みろぎをすべき。御教の。

ある事を。知れ。四海兄弟。

(五)

王政に。みろぎの道は。ともなうて。

かくれもすれば。あらはれもする。

(六)

國會は。安のかはらの。神はかり。

岩戸開きの。手だてなりけり。

(七)

天地とともにつたはる。日の本の。
君は世界の。まもり神なり。

(八)

日月の。眼ひらぬて。みわたせば。
さてもたふとや。息の神徳。

(九)

司たる人はの。こらす。みうぎして。
君のこゝろに。和合なすべし。

(十)

教師たる人は。尚さら。みうぎして。
神の御息を。ゆめわするなよ。

をこな子は教次第の。ならひなり。

廣き心も。せまきころも。

道をうけ。神理を極め。理義を知り。

名にも形にもまよふ事なし。

名によるな。形によるな。わが國の。

教は神の。つたへなりけり。

様々に。人の教が。はびこりて。

青人草の。まよふかなし。

(五十)

よもすがら。人迷はせる。ばけものは。

狐たぬきの。たぐひなりけり。

(六十)

よしありを心の内に。かくせども。

身の行ひに。あらはれるなり。

(七十)

いたはしや。身のはど知らぬ。瘦我慢。

理を非にまげる。むねのくるしむ。

(八十)

我欲から。ひとの心に。へつらうて。

理を非にまげる。ものもあるなり。

へつらひの網にかかるな。様々の

ゑさにまよふな。道の友たち。

誠より。身も家國も。おたやかに。

治る御代ぞ。目出たかりける。

寢てもゆめ。さめてもゆめの世の中を。

知れば知るほど。目がおさめるなり。

目をこまませ。朝日かおやく。世の中に。

もはや寢言は。まきたくもなし。

(三廿)

神々に。勝手さままの。願ひ事。

いかなる人の。教なるらん。

(四廿)

息神は。願はずとて。守るなり。

産れ出るより。身のをわる迄。

(五廿)

日の神も。風も。虚空も。皆人の。

息にこもりて。身の守り神。

(六廿)

天の息。地の息。人は。息神の。

中にたかれて。居る事を知れ。

(七廿)

なかくに中のよい人さらになし。

なんじやかじやとて不足たらぐ。

(八廿)

安國の神の御息を知らぬゆゑ。

不足のところ。たゆる時なし。

(九廿)

先祖より。つたはる罪をはらへとて。

あくびをするも。神のさいうく。

(十三)

先祖より。つたはる罪の借財を。

はらふみろぎの教なりけり。

みうぎして。清き心の。うちはより。

吹き出す息は。すすしかりけり。

何事も。世界の事は。神はかり。

人の理屈に。行かぬものなり。

天照す。神のつたへ乃。御鏡に。

心をうつせ。四海兄弟。

我が心見れば見るほど。見ぐるしや。

ひがみもあれば。慢心もあり。

我欲から。上に目がつき。横にはひ。

心はかたの。如くなるなり。

心から。顔にひがみをぶらさげて。

さぞ悔しかる。偕いたは志や。

日の神を。むねの岩屋に。とじおめて。

こころの内ぞ。どこやみにすな。

我が息を。神の御息に。いれかへて。

君の心に。かなへ世の人。

世の中の人夫婦のみな元は。

ぎみ兩神のをしへなりけり。

世の中の君臣父子や兄弟の。

元をたたせば天照す神。

日の本は地球世界の父母の國。

あふぎたまへや四海兄弟。

手のさきを洗うて神に祈るより。

心はらうて禮拜をせよ。

みろぎして。誠の道を。守りなば。

長く子孫の。つきる事なし。

神代から。長くつたはる。日の本の。

君は世界の。鏡なりけり。

をこな子の。阿和手拍も。かいぐりも。

みそぎの道を。うけて知るべし。

御教の。子をもちて知る。親の恩。

人の情けも。神のめぐみも。

子にゆづる。親の家督は唯ひとり。

まことの道の外なかりけり。

財産を。皆我がもの。思ふゆゑ。

長く子孫のたもつ事なり。

金よりも。心は國のたからなり。

みかけはひかる。神の御息に。

はく筥。祓ふはたきに。ふく布巾。

家も心も。掃除せよとて。

火火出見も。禊の道に。のりのふね。

息の修行を。三年したまふ。

海原の潮のみちひは。ひと人の。

息の出入の。如くなりけり。

心より。外にはのりの。船はなし。

吹き出す息の。風のまに〜。

君が代と。ともに成立つ。御教は。

神のつたへの。安國の道。

道の種。からすもほらで。新玉の。

春をむかへて。目出たかりけり。

新年に。門松たてて。志めかざり。

岩戸開きの。志る一なりけり。

元日と。大つともりは。裏れもて。

はらひすませば。毎も正月。

鬼は外。福は内へと。みそまきして。

清き心が。せつふんの忠誠。

萬物はみな日の神の分みたま。
星もはたるも。月も地球も。

考へて。わからぬ事は。神はかり。
思ひ通りに。行かぬ世の中。

妻は右。夫はすべて。左りから。
廻り直せや。神のつたへに。

右左り。廻り直しを。知らぬゆゑ。
勝手きままの。子が出来るなり。

(三十六)

大病は人のところのやまひにて。

身のわづらひにまよるものなり。

(四十六)

やむ時は心志づめて息長し。

身の養生がとかく專一。

(五十六)

息長は心のくすり。働きは。

我が身の上の薬なりけり。

(六十六)

息長に日々の務めを。はげみなば。

罪もけがれも。自然なくなる。

(七十六)

息神のめぐみを知れと思ふかな。

生きとし生ける人はのこらす。

(八十六)

文明の御代も神代のいにしへも。

誠の道はかはる事なし。

(九十六)

御教を日々の務めにあてはめて。

誠をつくせ。人知らずとも。

(十七)

法律にゆるす家業の道なれば。

何をばげむもはとる事なし。

およろ世に。神の御息を。知らぬほど。

はじの恥たる。はじはあるまじ。

神理さへ。わかればわかる。よしあしの。

わからぬゆゑに。證據裁判。

枝葉より。元はなかく。わからぬぞ。

元より枝は。よくわかるなり。

ふる雨の。水にけがれは。なげれども。

ところ次第に。にとるかなし。

すめらぎの。うつく三種の神器ころ。

天照します。神の御ころ。

敷鳴の。やまと心を。たづぬれば。

つるぎと玉と。御鏡の徳。

朝夕に。玉もつるぎも。御鏡も。

心にかけて。みおく御はらひ。

唯はらへ。はらひ不足の。なかりせば。

向ふところに。敵なかるべし。

ふりかかる。身の災難を。引きうけて。

見ればところの。ゆたんだ敵。

世の中に。がき大將の。はびこりて。

子ども喧嘩の。たゆる事なし。

れうろしや。ゆる思ひの。火の車。

つくる大工は。れのが慾心。

表むき。山のけしきは。よけれども。

借もきたなき。よこしまの浦。

元をすて。末の教に。まよふゆゑ。
さかさま事に。かかるものなり。

憂きふこの。數をかさねて。思ふかな。
とて。理屈に。行かぬ世界と。

鶏鳥も。聲を限りに。うたふなり。
人に誠の。目をさませとて。

たぢからの。神の御息の。いとをにて。
むねの岩戸は。開くものなり。

學問の外にみろぎの道を受け。

神の御息を。さこれ世の人。

慢心や。ひがみ心や。不足心。

はらふみろぎは。世の教なり。

世はすすむ。人は智識を。みかくべし。

神智人智を。とるにるとめて。

誠はど。つらき樂しき。事はなし。

うそにまけたり。まけて勝たり。

(一十九)

神明に見はなされたるものは皆。

身に災ひのたゆる事なし。

(二十九)

誠より思ふところの深ければ。

ふしぎにたすけたまふ息神。

(三十九)

誠とは神と君とをうやまひて。

下をあげられむ心なりけり。

(四十九)

身は土に息は虚空にかへるなり。

種は子孫に産れかはりて。

(五十九)

親々の。みたまは祭る。ひと人の。

心の内に。ねはしますなり。

(六十九)

冬ごもり。ならぬかんじん。するもよし。

春はさくらの。花もさくなり。

(七十九)

神眼を。開かぬものは。あきめくら。

四恩の道も。よくはわからず。

(八十九)

あやまちを。あらため直せ。何事も。

神の御息に。はらひ清めて。

孝行も。忠義も。自然。出來るなり。

神のつたへの。道をそめて。

蒼天や。地球や人の。みな元を。

さとりたまへや。四海兄弟。

明治卅八年十二月廿日印刷
明治卅九年一月一日發行

定價 金拾錢

著作兼 發行者 東京府平民 中山瀧太

東京市淺草區馬道町 壹丁目參號七番地

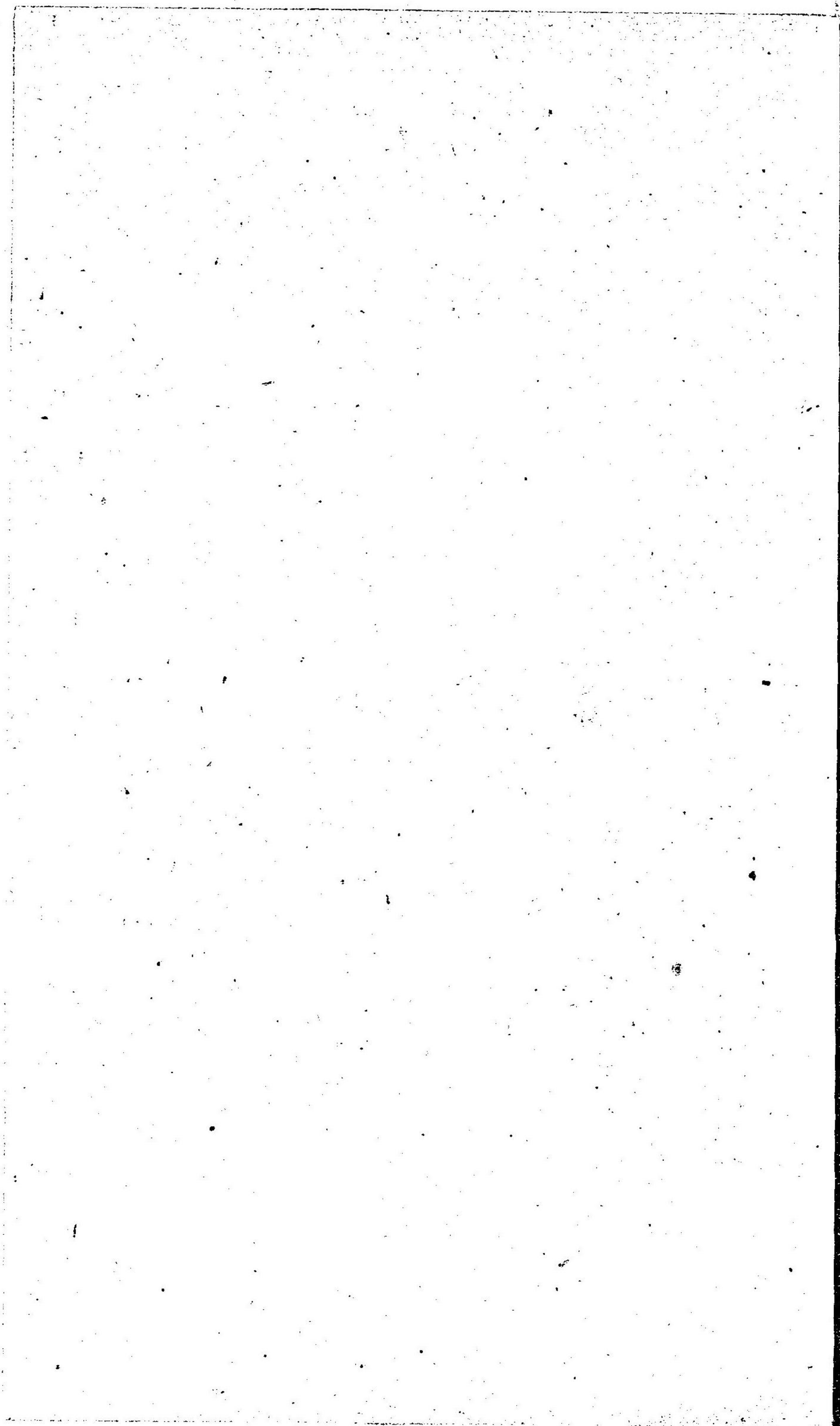
印刷者 東京府平民 中山清助

東京市淺草區馬道町 壹丁目參號七番地

著作 所有

印刷所 細野 柳之助

東京市淺草區 駒形町卅五番地



Vertical text columns on the right side of the page, including a small rectangular box containing text near the bottom.

